

分裂を恐れずイエスの側に立て

ルカによる福音書 12:49-53

(そのとき、イエスは弟子たちに言われた。) 「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。今から後、一つの家にも五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。

父は子と、子は父と、
母は娘と、娘は母と、
しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、
対立して分かれる。」

説教

わたしは火を投ずるために来た。平和をもたらすためではない、むしろ分裂だ。福音はこのようにイエスのことばを伝えます。

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

マタイ 11:28

このような優しいことばをかけてくださるイエスとはまるで別人です。

いまの聖書解釈の主流は「決断」を迫る「厳しいイエス」のことば、と解釈しています。神の国を信じるか、信じないのかという決断をイエスは求めているという意味です。イスラエルは西暦70年ごろローマ帝国によって滅ぼされます。そして生き残ったイスラエルの民は故郷から追い出され、各地へ散り散りバラバラになりますが、西暦の300年ごろにキリスト教はローマ帝国の国教となりイエスの思いはひとつの実を結びます。この史実をふまえて「決断を迫る厳しいイエスのことば」という解釈になります。イエスの願

いを受け入れた多くの民がローマ帝国を動かしキリスト教が国教と認められたのは、イエスの決断に応答した結果だというわけです。

しかし、歴史は終わりを迎えたわけではなく、現在も続いています。イエスのことばを原理的に解釈して放火をする人や学校やショッピングモールで銃を乱射する人は今でもいます。また、世界の国々は互いに銃を突き合わせて、核ミサイルを突き付けて表面的な平和を保っている状態だとも解釈できないことはありません。

**わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、
どんなに願っていることか。ルカ 12:49**

「火」は聖霊をさしているという考えがあります。「火」が銃口や核ミサイルを意味するのではなく、聖霊の力だとすれば、私たち一人ひとりが聖霊の力を受け取り、それをイエスの願いに重ねることができるようになります。イエスの受けなければならない洗礼（ルカ 12:50）をわたしたちも同じように受けとめ、分裂を恐れることなく、イエスと同じ道を歩んでいくことができますように。